毎日俳壇

井上　康明　選

原爆忌老母テレビに黙禱す
宝塚市　藤田　晋一

△評▽追悼式典中継のテレビに手を合わせる老いた母の姿に、作者は戦後の歳月を感じているのだろう。8月6日の広島を想像した。

大仰に風を迎ふる蓮青葉
弥富市　富田　範保

△評▽蓮青葉は大きくなったハスの葉のこと。「大仰に」という描写が行く夏の風を思わせる。

朝日浴びたる電柱と油蟬
長岡京市　みつきみすず

白木槿水煙たつ雨の来て
甲府市　清水　輝子

大輪のあさがほ河野裕子の忌
東京　徳原　伸吉

雲の峰太郎と呼べば牛が鳴く
唐津市　梶山　守

アダムとイブの無花果を摘みにけり
越谷市　安居院半樹

アフリカや大河と銀河合流す
北本市　萩原　行博

夏巡業ビールケースを椅子にして
岡山市　貝畑　信行

夕焼けの高さに掲ぐ優勝旗
甲斐市　松田　健嗣

片山由美子　選

もう雲に覆はれてゐる夏の山
狭山市　小俣　敦美

△評▽さっきまで山の全容がくっきり見えていたのに、という驚きが伝わってくる。天候が変わりやすい夏山らしさをとらえた。

水やれば揺れて応へぬ秋海棠
日高市　落合　清子

△評▽水やりの水がかかっただけでも揺れる花。中七の文語表現が頼りなげな美しさを伝える。

蟬しぐれ赤き自転車走り抜け
池田市　高倉　明子

すぐ落ちる父の線香花火かな
川越市　石田浩二郎

きりぎりす線路は西へ東へと
吹田市　初坂　宣子

灯の窓につぶてとなりて黄金虫
姫路市　板谷　繁

機関車に手を振る父子雲の峰
いなべ市　新実　康子

聖堂の暗きに慣れて汗拭ふ
海南市　塚月　凡太

ベランダにしばらく鳴きて処暑の鳩
日野市　田村登代子

わが町の銀座通りの秋祭
平塚市　日下　光代

小川　軽舟　選

夕焼や碁笥に残りの石わずか
郡山市　寺田　秀雄

△評▽碁石が盤面を占め、碁石を入れる容器には残りわずか。その手触りがさびしい。夕焼にこの一日の名残を惜しむ気分がある。

那智黒の石の響きや夏座敷
鴻巣市　荻野　道宏

△評▽那智黒の碁石だろう。那智の地名が効いて、その響きにすがすがしさを感じる。

夏萩の風にすずめの水呑場
龍ケ崎市　中山美恵子

さるすべり母の言葉の減つてゆく
宗像市　波田てつお

昭和のポスター夕焼によく染まる
甲府市　村田　一広

門柱にシーサー吠える大暑かな
東京　石川　昇

板の間の野良着の母の昼寝かな
福岡　手島喜美江

明易し白む寝所に風の声
市原市　鈴木　孝夫

炎昼やスライディングの砂煙
横浜市　宮崎　正敏

炎天やコンビニに餡ぱんを買ふ
さいたま市　関根　道豊

西村　和子　選

白粉花が咲いてそろそろ夕支度
坂戸市　沼井　和江

△評▽日没間際に咲きだすおしろいを目にして、夕げの支度を始めようと思う。時計をみるより詩的な生活実感がある。

星仰ぎては天幕を出這入りす
加古川市　中村　立身

△評▽天幕はキャンプのテント。満天の星の素晴らしさを人の行為を描くことで想像させた。

打ち水のあとの対決へぼ将棋
諫早市　麻生　勝行

万屋と呼ばれて今日は祭笛
那須塩原市　谷口　弘

切り口にふくらむ滴胡瓜採る
神戸市　中林　照明

大夕立分水嶺を駆けくだる
川越市　石田浩二郎

雲の峰海へ流れて崩れけり
鴨川市　冨川　康雄

勘当も死語になりけり凌霄花
秋田市　神成　石男

処方薬心もとなし心太
我孫子市　桑原真喜子

路線バス神輿の通過待つてをり
葛城市　八木　誠

ことばの五感

道が消えた

川野里子

・見失うことと失うことの差を麦畑にて思いていたり
永田紅

道が消えた。正確には目の前に道はあるのだが、この先はオフロード用の車でしか走れない。谷や丘が激しく入り組み、砂漠の彼方に消えている。車での旅を始めて1週間目、ここは米国カリフォルニア州に広がるモハーベ砂漠の真ん中で、近回りしようと入り込んだ道がオフロードレース用だったのだ。

とにかく引き返そうとUターンすると前輪が砂にはまって動かなくなった。慌ててアクセルを踏み込むとタイヤが嫌な音を立てて空転する。さらに深く砂にはまる。一番やってはいけないことだった。

車から出て空を仰ぐ。点々とイラクサが生え、サボテンが見える。わたしはこの平原の点だ。わたしがここにいることを誰も知らない。一番近くの町まで80マイル。歩けばまる2日かかる。この暑さの中だから3日か。冷静になれ。Tシャツを脱ぎ、ペットボトルの水を惜しみながらかけて湿らせる。タイヤの下に敷き込んで滑り止めにするのだ。もし、これが成功しなければどうなる？　タイヤの下の砂を掘る。砂にサボテンのトゲが混ざっており、指に刺さって悲鳴をあげる。

人間は道を失えばただの点だ。大地を、空を移動し、そして道につながる。その時初めて目的が表れる。例えば友達に会いに行くはずだったと。

Tシャツを何とか敷き込み、祈りながらアクセルをそっと踏む。くっとタイヤが大地をかむ。車が動く。砂から抜け出す。そして見失っていた道が現れる。

（歌人＝かわの・さとこ）